

<書評論文>

グローバル化とマイノリティへの暴力

Arjun Appadurai,
Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger,
 (Duke University Press, 2006)

Ernani Shoiti Oda

1 はじめに

アルジュン・アパデュライは、1949年にインドで生まれ、シカゴ大学で博士号を取得した後、ペンシルバニア大学、シカゴ大学、イエール大学を経て、現在、The New Schoolで教授を務めている。1996年に*Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*（邦訳『さまよえる近代：グローバル化の文化研究』）を刊行し、グローバル化のもたらす文化的変動について論じた。彼は、自身を文化人類学や地域学などの分野の研究者とみなしているが、この書物は社会科学一般にもかなりの影響を及ぼしている。メディアの展開と人口移動の増大という二つの要因をもとに、アパデュライは、国民国家というカテゴリーの危機と国境を越えるトランスナショナルな事象を理解するための新しい概念の必要性を強く唱えている。彼によれば、世界中で、人、資本、イメージ、イデオロギーなどのさまざまなフローが存在している。アパデュライの用語では、これらのフローはスケープ（scape）と呼ばれ、国民国家という枠組みに制限されずに作動している（Appadurai 1996）。

だが、彼の理論に対しては、グローバル化の捉え方が楽観的過ぎる、あるいは甘すぎるという批判も数多く出されてきた。そうした批判からすれば、彼の理論は、国民国家に拘束されていないことと、人々が自由になることを同一視している。しかし、その見解は今日の、世界中に暴力や苦しみが溢れている状況とは全くずれてしまっている。近年の戦争、民族浄化、テロリズムなどは人々の解放にはならないことは明らかである。

このような批判をうけ、*Modernity at Large*を刊行した後、彼はさまざまな論文でグロ

ーバル化と暴力との関係を論じはじめた。本書は、その研究成果をまとめたものである。著者が強調しているように、研究はいまだ継続中で、本書はエッセーの副題をもつものであるが、アパデュライの基本的な視点について、グローバル化、国民国家、そして暴力という最も重要な点に関する議論を中心に紹介し、検討をおこなうことにしたい。

2 国民国家の理念と「社会的不安定」「未完の不安」

90年代に入り、自由市場と自由貿易、民主主義、リベラリズム、メディアの発展などを求める声が世界的に高まってきたにもかかわらず、同時に、戦争、民族紛争、そしてテロリズムを含め、暴力や憎しみも激化してきた。それはなぜなのか。

アパデュライによれば、まず従来の国民国家の理念について注意を向ける必要がある。国民国家、またはその主権というものの中核となるのは、いずれも「民族の精神」(ethnic genius) という信念である。すなわち、それぞれの国民国家では、国民を構成する人々には何らかの特質や才能があり、誰よりも優秀な能力が備わっているという考えが働いている。いくら寛容や多元性を提唱しようとしても、あらゆる国民国家は、結局のところ、他の民族は劣っているとみなしている。それは国民国家の必然的な要素であり、世界のどこでも他民族への暴力へと移行する可能性が潜在的にあるとアパデュライは述べている。

だが、報道機関や交通機関の爆発的な進展を背景に、かつてないほど情報や人々の移動が増大してきた結果、それらの集団所属性が複雑になり、国民国家のヘゲモニーそのものも相対化されはじめた。一方で、従来の規範やアイデンティティも混乱し、社会的生活にはきわめて深刻な不安定性が生じてしまった。その結果、誰が味方で誰が敵なのかの見分けがつかなくなってしまっている。この不安定な文脈において、暴力や紛争が発生する恐れが非常に高くなる。

加えて、アパデュライはもう一つの要因を指摘している。彼によると、国民国家の論理は人々をマジョリティとマイノリティに分ける。そして時に、マジョリティは、マイノリティが非常に少ないと見なし、そのマイノリティを暴力で排除し、純粋な国民を形成することが可能だと思い込んでしまう。どのような状況がその考えを促すかについては、一般的な答えは存在せず、それぞれの具体的な状況次第である。しかし、その純粋な国民への願望はどここの国にもある。アパデュライはそれを(純粋な国民にむけた)「未完の不安」(anxiety of incompleteness) と呼ぶ。

もちろん、国際結婚や国際補助語、国際移民などの現象が展開している現代世界では、

マイノリティを完全に排除し、単一民族国家を作りだすことは不可能である。しかし、その事実はマイノリティへの暴力を抑えるのではなく、むしろ悪化させる効果をもたらしている。というのは、マジョリティの目標が確実に不可能だからこそ、それらの人々にはより激しい失望や挫折感が生じてしまい、ひいては、暴力の度合いがエスカレートしていくからである。アパデュライは、それを「過剰となる怒り」(surplus of rage) と言い、近年に勃発してきた闘争を特徴づけている要素と見ている。

3 脊椎的構造と細胞的構造

上記のように、現在の世界における暴力を促進しているのは、グローバル化の進行で形成された新しい流動的な世界そのものであるとアパデュライは唱えている。そして国民国家の覇権が弱まり、新たな形態をとっていく。このことを証明するため、彼は国民国家体制からグローバル化への移行を論じ、グローバル化の構造と近年の暴力の構造とを比較し、両者が一致しているということを示そうとする。

アパデュライによれば、国民国家に基づいた従来の社会体制に対し、多国籍企業の拡大に象徴されるようなグローバル化を反映している新たな社会体制が出現し、従来の構造との間に摩擦が生じている。以前は、普遍性、互酬性、対称性などの固定した原則を基礎にした体制が圧倒的に優先されていたが、今では状況に応じて、リスクやチャンスを考慮した上で、柔軟に判断することを求める新体制が重視されてきている。アパデュライが前者を「脊椎的 (vertebrate) 構造」と言い、「後者を細胞的 (cellular) 構造」と呼ぶ。

脊椎的構造の典型的な事例が主権国民国家体制であり、脊椎的暴力の典型的な例は国家間の戦争に他ならない。この場合は、二つの主体が明らかであり、味方と敵との区別、そして戦い方に関する規制が設定されうる。だが、今日、国民国家ばかりでなく、世界中に散在している本部のないネット・ワークというものも戦闘にかかわっている。そこでは、敵には固定した領土もないし、固定したアイデンティティもない。結果、暴力の形態が脊椎的な構造から離れ、細胞的な構造を持つようになってきている。国際的テロリストのネット・ワークを展開しているアルカイダは、そのプロセスを象徴しているとアパデュライは述べている。アルカイダのような組織の特徴は、人事や決定力の分散、そしてより順応性のある構成にある。そうした特徴は、柔軟な労働形態の普及、インフォーマルな交渉の増大、融資の国際フローの拡大などで進んでいる資本というものに極めて近い。とすれば、アルカイダは、グローバル化を代表している多国籍企業の構造と基本的に変わらないとアパデュライは主張し、今日にける暴力とグローバル化の相同性を指摘している。

4 グローバル化を体現するマイノリティ

このように、アパデュライは、グローバル化がもたらした細胞的な構造によって暴力の新しい断片的な形態を説明する。その上で、東ヨーロッパ、アフリカ、中東、東アジアという暴力や紛争が勃発してきた地域は、少なくとも一つの共通点があると言う。それはいずれの場合でも暴力の対象になるのが、それらの地域のマイノリティだということであり、したがって、なぜマイノリティが狙われているのかを問わなければならない。

アパデュライによれば、マイノリティという概念は恥辱と記憶の失敗を想起させるだけである。それぞれの国民国家を作るために、マジョリティは覇権を実現する必要がある、さまざまなマイノリティに対して暴力や抑圧を行う。だが、それらのマイノリティは、今でも存在しており、そのことによって、マジョリティのとした残酷な行動や純粋な国民の不可能性が常に顕在化している。

現在、マジョリティと国民国家の恥辱や失敗は、移民の増加などグローバル化という過程によってさらに意識されるため、グローバル化とマイノリティという二つの概念が重ねられてしまう傾向がある。国民=マジョリティは、グローバル化への不満や挫折感をマイノリティへと向け直す。こうして、グローバル化のもたらす不安定感や主権の動揺などの抽象的な問題がマイノリティの身体によって体現され、それらの人々がスケープゴートとなるのである。

アパデュライによれば、この過程で、国民=マジョリティは、「排他的アイデンティティ」(predatory identity) というものを採用してしまう。排他的アイデンティティとは、他者、あるいは他者の集団によって攻撃を受けているかのように思い込み、自らが生き残るためにその他者を除去するしかないという概念である。絶対主義やナチズムがその極だった事例であるが、実際には国民国家の下で展開してきた従来のリベラリズムという思想も排他的アイデンティティを引き起こすことが少なくないと認識する必要がある。

リベラリズムでは、個人とその理性が思想の核をなす。集団や共同体も重視されているが、それらは、個人の集合体として捉えられている。とはいえ、集団や共同体の規模があまりにも拡大すると、つまり人々の数が増えすぎると、個人の合理性が見失われてしまい、集団や共同体が個人の集合体ではなく、ただの群衆として作用することとなる。リベラリズムにとっては、まさしくその不合理的な群衆の登場が最も恐るべき問題に他ならない。それがリベラリズムの「大きな数への恐怖」(fear of large numbers) である。

ところで、リベラリズムの最大の問題が大きな数への恐怖だとすれば、本書の題名にあ

るように「小さな数への恐怖」(fear of small numbers)、すなわちマイノリティへの恐怖はいかにして生まれるのだろうか。一見、リベラリズムがマイノリティを守っているかのように見えるかもしれない。たとえば、選挙や裁判においては、多数決の原理が働くが、少数派の投票や意見は考慮しなければならないという考え方がある。しかし、アパデュライによると、その少数派への気遣いはただの手続き的なものに過ぎない。というのは、そこでのマイノリティは、一般的な価値観や歴史観などではなく、単に選挙や裁判という限られた手続きのなかの少数派としてしか把握されていないからである。

こうした手続き的な少数派 (procedural minorities) に対し、実質的なマイノリティ (substantive minorities) が存在する。エスニシティやジェンダーをもとに形成されているマイノリティがその例である。彼らは、特定の手続きだけでなく、日常的にマイノリティとして生きているのである。だが、こうした実質的なマイノリティは、リベラリズムによって擁護されている権利の外に置かれている。

この仕組みを理解するには、アパデュライが示しているインドの事例が役に立つだろう。インドでは、特に80年代半ばからは、ヒンドゥー教やそれにかかわっているラディカルな政党などの勢力が拡大していった。その結果、イスラム教徒という実質的なマイノリティに対する抑圧や脅迫も強まった。ヒンドゥー教の過激派の主張では、グローバル化による報道機関と交通機関の進展により、インドにいるイスラム教徒は、世界中のイスラム教徒と結びつくのが非常に簡単になってきたため、インドに暮らしているイスラム教徒はインドより、イスラム教の方に忠誠心を持っている。こうして、インドにおけるイスラム教徒の数自体は非常に少ないものの、彼らは世界中に広がっているイスラム教の一員として見られるようになった。そして、その膨大なイスラム教徒の人々は、たいてい狂信者やテロリストとして、すなわち暴力的で不合理的な群衆として見られてしまうこととなる。

したがって、実質的なマイノリティは、リベラリズムがどうしても避けようとしている群衆へと移行する可能性が高いと思込まれることが多い。伝統的なリベラリズムにおける大きな数への恐怖から、小さな数への恐怖が生まれるのである。

つまり、アパデュライの考えによれば、グローバル化の展開により細胞的構造をもつ組織や集団が増え、社会的不安定や未完の不安が生じるのであり、時代遅れの脊髄的構造に基づく国民国家の理念にこだわる人は、挫折感や失望を克服するために暴力を振るうしかないと思込んでしまう。そして、とりわけマイノリティ・グループを暴力の対象とすることには、リベラリズムの思想も加担しているのである。

5 遠距離政治学と草の根運動

最後に、アパデュライは、グローバル化の展開が必ずしも暴力や紛争を含意しているとは限らないと主張している。

今日、国民国家の枠に拘束されず、国境を越える運動や葛藤などのいわゆる遠距離政治学 (long-distance politics) というものがあり、そのもっとも目立つ側面は言うまでもなく、暴力や闘争などの負の事象である。さらに、アパデュライによると、以前の暴力と違い、現在の遠距離暴力は「アイデオサイド」(ideocide) と呼ばれる形をとっている。アイデオサイドとは、単なる特定の敵や国民国家だけではなく、ある文化、またはある文明を全体的に消滅させることを意味している。

しかし、アイデオサイドだけではなく、協力性や連帯感に基づいた遠距離政治学も可能であることに注意しなければならない。その典型的な例となるのは、いわゆる草の根運動、あるいは国際市民社会というものである。それらの特徴は、社会変動を実現するため、世界中に広まっているネット・ワークを通して多様なところで多様な集団から協力や支援を得ることにある。つまり、グローバル化のもたらした細胞的な構造をもとに、テロや虐殺ではなく、貧困、飢餓、差別、不満を解消することを目指している。具体例としてグリーンピース (Greenpeace) や国境なき医師団 (Médecins Sans Frontières) などのNGOやNPOが挙げられている。

こうした組織は、たいてい、多様な形で行政や大手企業に対し抗議運動の戦略をとっている。ところが、アパデュライによると、この対決的な態度よりも、行政と企業と協力しようとしている草の根運動の試みの方が興味深いものなのである。彼によれば、このような協力の戦略は、行政や大手企業によって操られる恐れがあることは否定できない。しかし、提携しながら自立性と批判的な立場を守っている運動も十分に存在している。アパデュライ自身が「国際掘っ立て小屋/スラム住人」(Shack/Slum Dwellers International) というNGOに加わっており、この組織は、貧困層が直面しているさまざまな住宅問題に取り組み、アジア・アフリカなどの政府だけではなく、国連や世界銀行とまで協力していると、アパデュライは強調している。彼からみれば、こうした非対決的なアプローチこそが、テロリズムや民族浄化に対して建設的なオルターナティブとして、遠距離政治学の肯定的な側面をもっともよく象徴しているのである。

6 考察

グローバル化が進展しているにもかかわらず暴力が発生しているのではなく、グローバル化が進展しているからこそ暴力が発生しているという本書の基本的な主張は重要である。とはいえ、さまざまな疑問点があることも確かである。ここでは、その最も根本的な問題点を簡単に取り上げたい。

まず、グローバル化と暴力とのつながりをめぐる本書の基本的な考察自体について考えなければならない。主張そのものは評価すべきだが、アパデュライによる議論の筋道には問題がある。というのは、彼の議論をよくみれば、暴力を引き起こしているのはグローバル化よりも、あくまでも国民国家の理念だとされているからである。たとえば、アルカイダなどテロリズムを行う集団を論じる際に、グローバル化がもたらした新しい細胞的組織構造が重視される。しかし、なぜ人がこうした集団に加わるかという問題に関しては、テロリストが国民国家の脊髄的構造に失望しているからだとされているのである。

あらゆる国民国家は、必然的に排他的で保守的なイデオロギーに基づいている。その頑固なイデオロギーはグローバル化のもたらしてきた変動や不安定に抵抗するために、民族紛争やテロリズムという形で暴力を生み出す。要するに、グローバル化自体はポジティブな現象でもネガティブな現象でもない。端的に言って、それは不可避なのである。にもかかわらず、国民国家の論理は非常にネガティブに描かれている。その論理には暴力や抑圧を行う性質があるとされている。一言で言えば、グローバル化ではなく、国民国家のほうの問題だということとなる。

したがって、本書の考え方は、*Modernity at Large*のものと基本的に変わらないし、グローバル化の捉え方は以前と同様に楽観的であるといってよい。グローバル化に抵抗し、国民国家に固執することが暴力の原因であるとするなら、国民国家へのコミットを放棄して、グローバル化とその流動性を甘受するしかない、ということが暗示されている。

アパデュライによる草の根運動の評価も、こうしたことから導かれている。つまり、草の根の運動も流動的な組織形態であるという点でグローバル化の論理を採用しているため、重要な役割を果たすであろうと、彼は期待を寄せているのである。

ここで注目しておきたいのは、アパデュライが、抗議よりも協力にもとづく運動を評価しているということである。つまり、グローバル化への批判や抵抗を行う運動は、やや軽視されている。こうした点では、彼はウォーラステインと違う立場に立っている。ウォーラステインも社会運動の力を強調しているが、抗議運動や反グローバリゼーションと深くつながっている世界社会フォーラムなどの試みがある程度支持している（Wallerstein

2002)。それに対してアパデュライは、世界銀行やさまざまな政府と手を組んでいるNGOに目を向けている。彼は、このような組織がその自立性を維持しようと指摘するものの、どうやってそれが可能になるのかを十分に説明してはいない。単純な楽観主義に陥らないように、協力を基盤とした運動をめぐる緊張や論争を取り上げる必要がある。

最終的には、アパデュライによる国民国家への不満とグローバル化への期待は、彼が国民国家体制（脊髄的構造）からグローバル化（細胞的構造）への移行をどう捉えているのかということとつながっている。アパデュライの議論では、グローバル化以前の世界とグローバル化以降の世界との区別がはっきり示されている。グローバル化の前は、世界が国民国家を中心に、閉鎖的で、固定的な構造を持ち、単純な姿をとっていた。それに対し、グローバル化されてきた現在の世界では、あらゆる社会的関係が流動化され、不安定や両義性が劇的に増大していく。その結果、今日、国民国家が純粋さに固執した場合、必然的に葛藤や紛争をもたらす。グローバル化の複雑性こそが、解決への道を拓く唯一の可能性を秘めているとされるのである。

いうまでもなく、こうした枠組みはアパデュライだけではなく、多くの論者によって採用されている。その中には、肯定的な見方もあるし（Giddens 1999）、より批判的な視点（Bauman 2005）をとる立場もあるが、いずれにせよ、単純な構造から複雑な構造への転換が指摘されている。しかし、これらの議論が前提にしている単純な社会的構造というのは実際にあるのだろうか。今日、小規模の部族や村落の構造もまったく単純なものではないことは、周知のことではなかろうか。たしかにアパデュライの議論は、非常に興味深いものである。けれども、マイノリティへの暴力を国民国家の単純な理念から説明するだけでは十分な説明ではないと思われる。さしあたって、グローバル化自体が直接に暴力を引き起こすことについても考察する必要があるだろう。

参考文献

- Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
 Bauman, Zygmunt, 2005, *Liquid Life*, Cambridge: Polity Press.
 Giddens, Anthony, 1999, *Runaway World: How Globalization is Changing our Lives*, London: Profile Books.
 Wallerstein, Immanuel, 2002, "New Revolts Against the System", *New Left Review*, 18: 29-39.

(Ernani Shoiti Oda・修士課程1年次)